

二百十日

小川未明

青空文庫

空高く羽虫を追いかけていたやんまが、すういと降りたとたん、大きなくもの巣にかかつてしまいました。しまったといわぬばかりに、羽をばたばたして逃げようとしたけれど、どうすることもできませんでした。

縁先で、新聞を読んでいたおじいさんは、ふと顔を上げた拍子に、これが目に入つてじつと眼鏡の底から、とんぼの苦しがるのを見たのであります。

かわいそうにと、おじいさんは、思いました。年をとると、すべてのことに対して、懼れみ深くなるものです。そして、いまにもくもが出てきて、目の前で、とんぼの殺されるのを見るにしのびませんでした。

「正二や。」と、おじいさんは、孫を呼びました。自分にはどうにもならなかったからです。

あちらのへやで、明日の宿題をしていた正二は、何事かと思つて、すぐに祖父のところへやつてきました。

「なんですか、おじいさん。」

「あれ見な、いまやんまが飛んできて、くもの巣にかかったんだ。かわいそうだから助け

てやんなさい。」

正二は、いつも、こんなようなことに出あつたときは、人にいわれなくとも、自分から進んで助けてやる性質でありました。

「くもは、どうしたのか、出てきませんね。」と、正二は、不思議そうに、見上げていました。

「いや、どこかに隠れていて、やんまの弱のを待つているのだ。なかなかずるいやつだからな。はやく助けてやんなさい。」

おじいさんは、まごまごしていると、やんまが、疲れて死んでしまふと思つたのでした。正二は、勝手もとへいつて、長い物干しざおを取つて、裏の方へまわりました。庭には日ごろから、おじいさんの大事にしている植木鉢が、たなの上に並べてありました。彼は、それを落とさないように、自分の力にあまる長いさおを持ち上げて、垣根の隣までいきましたけれど、まだそのさおの長さでは、くもの巣までとどきませんでした。

「おじいさん、だめですよ。」

やんまは、まだ生きていて、ときどき思い出したように、羽ばたきをしました。けれど、どうしたのか、くもはまだ姿を見せませんでした。

「さおが短いか、よわったのう。」と、おじいさんは、眼鏡の中から、小さな光る目で、やんまを見つめていられました。

「ああ、重い。」

正二、さおをドシンと垣根の上へ倒しました。そのくもの巢は、高い木立の枝から、隣家の二階のひさしへかけているので、隣の屋根へ上がるか、それとも隣の塀の上に登らなければ、さおがとどかなかつたのでした。

「かまわずにおきましようか。」

しかし、おじいさんには、知らぬ顔をしていることができませんでした。

「あちらの塀へ上がれば、とどくだろう。」

「僕、やだなあ。」

「いい子だから、助けておやり。なんでもおまえのほしいものを買ってやるから。」と、おじいさんは、いいました。

「ほんとう？ おじいさん、僕にハーモニカ買ってくれる。」と、正二は、聞きました。このあいだから、おじいさんに、ねだっている品です。

「買ってやるから、助けておやり。」と、おじいさんは、いいました。

これを聞くと、正二は、一時は、うれしそうな顔つきをしましたが、急になんと思つたか、

「いいよ、おじいさん、僕買つてくれなくてもいいの。」といいながら、さおをかついで、隣の家の門を開けて入つていきました。

ちようどそのとき、そろそろ糸を伝つて、大きな黒いくもが、やんまに迫つていました。

これを見た正二は、急いで、塀へ上がると、

「こいつめ。」といいながら、さおでまずやんまを払い、つぎにくもを落としました。巣がはずたずたに切れて、やんまは、やつと飛んでいくことができたし、くもはちぢこまつて下へ落ちました。

「おお、ようした。ようした。ハーモニカを買つてやるぞ。」

正二が、庭へもどつてくると、おじいさんは、生き物の命を助けた喜びに、顔をかがやかしていいました。

「おじいさん、こんど僕、いいお点をもらつてきたときでいいよ。」

「どうしてか、なぜ今日ではいらないのだ。」

おじいさんは、不思議に思いました。

「どうしても。だって、やんまを助けてやるのは、あたりまえだろう。」

正二、こんなことで、日ごろの言い分を通すのは、あまりうれしくなかったからでした。

「そうか、それは、感心だ。ごほうびをもらわなくても、正しいことは進んでやるのが善い子供なのだ。」

おじいさんは、上機嫌でありました。正二も、おじいさんにそういわれると、ハイモニカを買ってもらったよりもうれしかったのでした。

晩方のことです。

正二が、外へ出ると徳ちゃんが、飛んできました。

「正ちゃん、おもしろいことをしない。」といました。

「おもしろいことって、どんなことだい。」

「お化けごっこだよ。」

「お化けごっこって、どうするの。」

徳ちゃんは、正二に、いろいろ知恵を与えたのです。

「すてきだね、待つておいで。僕、家へいつて絵を描いてくるから。」と、正二は、走り出そうとすると、

「僕、お母さんのエプロンを持つてくるからね。」

徳ちゃんも、家へ向かつて駆けていきました。二人は、他の子供らに、知られぬように、とうもろこしの畑であうことにしました。脊高く茂ったとうもろこしの畑には、うまおいが、鳴いています。星晴れのした、青い夜の空を白い雲が走っていました。もうどこもなくゆく夏の姿が感じられたのです。

徳ちゃんは、お母さんのエプロンを持つて先にいつて待つていると、正二は、自分で急ごしらえの般若面を持つてやつてきました。

「ああ、ろうそくがなくては、いけないね。」

「そうだ、うりで行燈を造ろうよ。僕、小さいろうそくを持つてくるから。」

正二は、家へ仏壇へ上げるろうそくとマッチを取りにいくと、徳ちゃんは、その間に大きなうりをさがしてきて、中の種子を出して、燈火のつくような穴を明けていました。そこへ正二がもどつてまいりました。これで、すっかり用意ができてしまいました。

「だが、お化けになるの。」

「じゃんけんして、負けたものにしようや。」

二人は、じゃんけんをしました。正二が、負けました。

「正ちゃんが、お化けだよ。」

「おもしろいな。」と、正二は、白いエプロンを着て、自分の造った般若面を被りました。

「どんなだい？ 徳ちゃん。」

「おう、すごいよ。ほんとうのお化けみたいだ。」

「ほんとう。」

「頭へ、どうもろこしの毛をつけるといいよ。」

徳ちゃんは、枯れた毛を取ってきて、正二の頭へのせました。それから、うりのちよ

うちに、火をつけて、ぶらさげました。濃い緑色の火が、あたりを暗く照らして、

正二の白い姿を気味悪く見せました。

「やあ、おつかないな。」

徳ちゃんは、これを見て逃げ出そうとしました。

「徳ちゃん、そんなにおつかない。」

「ぞつとするよ。」

「おもしろいな。だれか呼んでおいでよ。」と、正二は、とうもろこしの葉蔭に隠れま
した。

往来で、二人の小さな子供が、もう暗くなつたのに、まだ遊んでいました。勇ちゃん
と光ちゃんです。

「明日は、二百十日だよ。川の堰をはらつて、魚を捕るのだね。」

「勇ちゃんも川へ入る？」

「入るさ。」

「僕、兄さんが魚を捕つて投るのを、岸にいて、バケツへ入れるのだ。」

「光ちゃんも川へお入りよ。」

「なまずがとれるといいな。こいもいいな。」

「かにかいいよ。」

「かめの子が、いいよ。」

そこへ、徳ちゃんが、やつてきました。

「勇ちゃん、畑にお化けが出るよ。」

「お化け？ うそだい。」

「うそなもんか、いつてごらんよ。」

三人は、さびしい畑の方へ歩いていきました。とうもろこしの葉が、夕風に動いて、さつきから鳴いているうまおいの声、夜のふけるにつれてだんだん冴えていました。

「どこに？」

「もつといくんだよ。」

「こわいな。」と、光ちゃんが、いいました。

「お化けなんか、うそだい。」と、勇ちゃんは、先になろうとして、なすの畑へ踏み込みました。

「ほら、あすこに、青い灯が……。白い着物を着て立っているだろう。」

「あつ、お化けだ！」と、光ちゃんが、逃げ出しました。つづいて勇ちゃんも逃げようとしたが、徳ちゃんが立っているの、徳ちゃんのうしろから、じつと、とうもろこしの畑をすかして見ていました。

「だれか、いたずらしたんだよ。」

「勇ちゃん、そばへいける？」

「こわいな。」

「それごらんよ、だれかおおせい呼んでおいでよ。」

このとき、勇ちゃんは足もとの土を拾って、青い灯を目あてに投げました。すると、青い灯が動いて、白い着物がこちらへ近寄ってきました。

「こわい。」と、徳ちゃんが、逃げ出しました。勇ちゃんは、独りしにもの狂いに土を捨てて投げていました。そのうち、土がお化けにあたったのか、

「あつ。」といつて、青い灯が下に落ちました。

「目に土が入った……。勇ちゃんおよしよ。」

白い着物を着た、お化けが、いいました。

「正ちゃんなの、なあんだ……。」

勇ちゃんは、すぐそばへ走っていきました。

「お面を被っていたの。」

「目が痛くてあかないよ。」

「正ちゃん、ごめんね。」

勇ちゃんの叔父さんの家は、ここから近かったです。村の端にあつた、お医者さまで

した。内科だけでなく、目も診察するのです。勇ちゃんと徳ちゃんは、正ちゃんの手を引いて、勇ちゃんの叔父さんの家へいきました。

叔父さんは夜の往診からちようど帰ってきたばかりでした。

「どれ、どれ。」といって、正ちゃんの目を見て、水で洗ってくれました。そして、薬をさしてくれました。

「どう、もうなんともないだろう。」

正二は、目を開けると勇ちゃんの叔父さんは笑っていました。

「叔父さん、お化けごっこをして、僕が土を投げたんだよ。」

「乱暴をして、目の中へ土を入れたりしてわるいじゃないか。」

叔父さんは、正二のポケットからのぞいている般若面を見つけて、

「これを被ったんだな。」といいながら、引き出して自分で被るまねをしました。みんなが

ひょうきんな叔父さんの顔を見て笑いました。

それから、三人は、話しながら暗い道を帰りました。

「光ちゃんは、どうしたろうか。」

「もう、ねんねしたろう。光ちゃんは、臆病だね。」

「勇ちやんもおつかかなかつたろう。」

「僕、徳ちやんが、大騒ぎをしないから、きつとだれかいたずらをしているのだと思つたよ。」

「いたずらなんかして、ばかをみてしまった。」と、正二は、後悔しました。このとき、木の枝に当たる風が、いつもとちがって強かつたのでした。

「二百十日の風だね。」と、徳ちやんが、いいました。思い思いに、空を仰ぐと、星の光が見えたり隠れたりしました。雲が走っていたからです。

「明日は、土曜だから、学校から帰ったら、川へ行って、魚捕りをしよう。」と、たがいにいって、別れました。

正二は、夜中にふと目をさますと、ゴウゴウといつて、風の音がしています。

「風が西へまわったから、雨になるかな。」と、庭の方で、おじいさんの声がしました。

「おじいさまは、起きていらつしやるのだらうか。」と、正二は耳をすましていると、たなの上の植木鉢を下ろして、家の内へ入れているようすでした。おじいさんは、実のついたぎくろから先に入れられたであろうと思ひました。

「ぎくろのつぎにはどれかな。」

正二は、寝ながら、いろいろあつた植木鉢のことなど考えました。「梅か、それとも松かな。」そんなことを空想しているうちに、いつかまたぐつすり眠入ってしまった。

夜が明けました。けれども、まだ風の音がしています。正二は起きて庭先へ出てみると、いろいろの木の葉が、無理に引きちぎられたように、庭一面に散らばっていました。そして、百日紅の花が、ふさのつけ根からもがれていました。

学校へいく時分には、風はいくぶん衰えたが、頭の上の空には、まだものすごい雲が後から後から駆けていました。正二は、途中で同じ組の年雄くんに出あいました。

「年ちゃん、ひどい風だったね。」

「はとが帰らないのだよ。」と、心配そうな顔つきをして、年雄くんがいました。

「えつ、はとが。」と、正二は、驚きました。

「昨日、兄さんが、静岡の方から放したのさ、それがまだ帰ってこないのだ。」
 「風に出あつて、どつかに休んでいるんだろう。」

「千キロの記録があるのだけど、もう年をとっているから心配なんだよ。」

正二も、年雄くんの家のはとが気にかかったので、学校から帰っていつてみ

ました。だが、まだ、はとは帰かえつていませんでした。川かわの堰せきはらいが延のびたというので、年とし雄おくんと二人ふたりで、村むらの端はしを散歩さんぽすると、昨夕ゆうべ入はいった畑はたけのとうもろこしがだいぶ倒たおれて、頭あたまの上うへにひろがった、青あおい空そらが急きゆうに秋あきらしく感かんじられたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「小学六年生」

1939（昭和14）年9月

※表題は底本では、「二百一十日《とおか》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二百十日

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>